

アジア太平洋の人をつなぎ学びを育てる

ACCU

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

news

No. 421



特集

UNESCO WEEK



Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 発行

UNESCO WEEK 2024/25

第3回 ユネスコウィーク

開催期間

2024.
11/25~12/1

国立オリンピック記念
青少年総合センター

▶ ユネスコウィークとは

ユネスコウィークは、「持続可能な未来」をテーマに学び合える機会として、教育・科学・文化というユネスコの活動分野を中心に国内外でユネスコ活動に関わる多様な人が、世代や地域、分野、立場をこえて語り合う場です。2024年度に開催した第3回ユネスコウィークでは、国際シンポジウム、ユネスコスクール全国大会、ユースフォーラムにおいて、「知る」「つながる」「行動する」というプロセスを体験できる多彩な企画が行われました。参加者

として会場に足を運ぶ、企画者としてイベントづくりに携わる、自分たちの活動を発表するなど、様々な形で参加できるこのイベントにおいて、人と人がつながり、新たな視点や気づき、そして「協働」が生まれました。ユネスコ活動にすでに関わっている人だけでなく、これまであまり知らなかった人が関心をもつきっかけにもなり、「知らなかった」が「関わりたい」に変わる、参加者それぞれに実りあるイベントとなりました。

※本イベントは、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターの主催で開催されました。

開催概要

2024年11月25日から12月1日の1週間を「ユネスコウィーク」と題し、様々なイベントを通してユネスコ活動を紹介しました。

11/25-28

ユネスコ活動に関わる 情報発信やサイドイベント

11/28(木)16-17時

ユネスコスクールオンライン意見交換会「クイズで学ぶ!『デジタル時代のグローバルシティズンシップ教育:教員用ガイドライン』入門」

11/25(月)

コラム「ユネスコ職員 安川総一郎さんに聞く『ユネスコとわたし』」

11/26(火)

コラム「元ユネスコ職員 大安喜一さんに聞く『ユネスコとわたし』」

11/27(水)

コラム「ユネスコ研修生 大原瑞萌さんに聞く『ユネスコとわたし』」

11/29

国際シンポジウム「持続可能な未来 へと続く持続可能なコミュニティ」

11/30

第16回ユネスコスクール全国大会
「社会に開かれたユネスコスクール
～多様性と共生の未来への貢献～」

12/1

ユースフォーラム「『今から、ここから、わたしから』～ユースが集い、
創るユネスコ活動の未来～」

MESSAGE

私たちの多様な価値観と経験が、未来を彩ります。

持続可能で包摂的な未来の創造へ向けて、

それぞれの発想と活動への情熱を持ち寄り、

共に学び、考え、より良い明日への一歩を踏み出しましょう。

Day 1 11/29

国際シンポジウム

「持続可能な未来へと続く

持続可能なコミュニティ」

タイ、インド、日本から専門家を迎え、国際シンポジウムを行いました。コミュニティレベルでの持続可能な取組の可能性について議論が交わされ、気候変動や社会的不平等といった複雑な課題に対し、国や分野をこえた協働の重要性が共有されました。参加者は、互いの経験や視点と重ね合わせながら、未来に向けた新たな連携のヒントを得る貴重な機会となりました。



インド環境教育センター 代表
カルティケヤ・サラバイ氏

「持続可能なコミュニティを育むーグローバルなインパクトへ向けたESDと地域活動の統合ー」と題し、インド国内及び国際社会における持続可能なコミュニティ形成の取組について、インド環境教育センターのカルティケヤ氏にお話いただきました。気候変動や生物多様性の喪失など地球規模の課題に対し、学校教育だけでなく、家庭や地域、自治体、国家をも巻き込んだ「Greening Education (緑化教育)」の取組が強調されました。緑化教育のカリキュラム化や教員研修、緑化教育を通じた学校コミュニティとの連携、伝統知の継承、女性や若者のエンパワメントなど多層的なアプローチが展開され、地域資源を活かした持続可能な開発の実践が多数紹介されました。こうした草の根の活動が、環境教育を軸にコミュニティと世界をつなぐ力となる、持続可能な社会のあり方を示してくださいました。

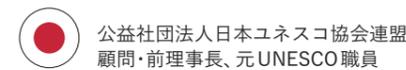


タイ・ラノーンユネスコエコパーク 主事
カヤイ・トングヌイ氏

タイ・ラノーンユネスコエコパークのカヤイ氏より、「沿岸地域の持続可能な開発と海洋との健全な関係構築」について、事例をご紹介いただきました。タイ王国南部に位置するマングローブの原生林が広がるこの地域は、13のコミュニティに約3万人が暮らしており、かつて鉱山や養殖などの開発により自然が大きく失われました。ユネスコエコパークへの登録を機に、保護・植林活動や環境教育、観光活用などが進み、「自然と共に生きる」地域づくりが実現しています。



※2025年5月にカヤイ氏がご逝去されました。ご功績に深く敬意を表し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 顧問・前理事長、元UNESCO職員
野口 昇氏

「地域の伝統文化や自然を次世代につなぐ未来遺産運動」と題し、日本ユネスコ協会連盟の野口氏にお話いただきました。ユネスコの文化・自然遺産保護の理念に呼応し、同連盟は「プロジェクト未来遺産」として地域の大切な文化・自然遺産を未来に伝える活動を支援・登録しています。今回は広島県広島市の被爆樹林の継承を通じて平和・希望・共生を語り継ぐ活動、岩手県の久保川での伝統的な農業と自然保全、和歌山県の孟子不動谷での生物多様性と地域活性化の取組等が紹介されました。



参加者の声
国際シンポジウムに参加した参加者のアンケートからご紹介いたします。

普段なかなか関わることのない、世界で活躍する方々のお話を聞くことで、自分の将来やりたい分野に関する貴重な知見を得ることができた (20代 学生)

インド、タイにおけるESDの取組が理解できた。国際的な枠組みの取組が進められていることに対する希望を感じた (60代 NGO/NPO)

目指すゴールが確認できた。持続的に活動を行うためにどうしたらいいかの理解できた (30代 教員)

ユネスコの理念に触れることができ、世界にも地球市民として想いを寄せるシンポジウムとなった (40代 教員)

スケジュール

- 18:00-18:10 オープニング
- 18:10-18:30 基調講演
「持続可能なコミュニティを育むーグローバルなインパクトへ向けたESDと地域活動の統合ー」
- 18:30-18:45 実践事例①
「地域の伝統文化や自然を次世代につなぐ未来遺産運動」
- 18:45-19:00 実践事例②
「沿岸部コミュニティの持続可能な発展と海洋との健全な関係構築ータイ、ラノーンユネスコエコパークにおける取組ー」
- 19:00-19:25 パネルディスカッション
- 19:25-19:30 クロージング



サイドイベント& 情報発信

11/25~28

ユネスコウィークの前半4日間は、オンラインイベントやウェブサイトを中心とした企画を実施しました。

11/28 16:00~17:00

ユネスコウィークサイドイベント

ユネスコスクールオンライン意見交換会「クイズで学ぶ!『デジタル時代のグローバルシティズンシップ教育:教員用ガイドライン』入門」を開催しました。法政大学教授 坂本旬氏より、ユネスコが公表したガイドラインの解説を中心に、ICTやAI時代のメディアリテラシー等についてお話いただきました。

ユネスコウィーク連動コラム



元職員
大安 喜一氏

▶元ユネスコ職員 大安喜一氏に聞く『ユネスコとわたし』

タイ・バンコク及びバングラデシュ・ダッカで十数年にわたり、持続可能な開発のための教育(ESD)や地域学習センターの支援に携わり、教育政策と現場の橋渡しを担ってこられた大安氏。国際的な枠組みの方向性を定める仕事をする一方で、政策レベルと地域レベルの「距離感」を感じるなど、ユネスコ職員としての長い経験からの学びをお話いただきました。

全文はこちら



現職員
安川 総一郎氏

▶ユネスコ職員 安川総一郎氏に聞く『ユネスコとわたし』

2013年に国土交通省から派遣され、2017年にユネスコ職員に正式採用、以来、防災分野で国際的プロジェクトを自然科学局防災課長として統括されています。地震・文化財・AIによる早期警報など8分野に取り組むほか、予算管理や現地実施にも深く関わり、防災知識の維持と強化を両立しています。感謝の声に支えられた、国際業務のやりがいも語られました。

全文はこちら



研修生
大原 瑞萌氏

▶ユネスコ研修生 大原瑞萌氏に聞く『ユネスコとわたし』

岡山大学博士課程でユネスコや国際法について研究されており、2024年から文部科学省のプログラムにおいて、ユネスコ本部教育局ESD課にて1年間研修生として勤務されました。ウェビナーの企画・運営や各国のESD戦略支援などに携わり、業務を通じて異文化理解やコミュニケーションの難しさに苦心しながら、自身の成長を実感したことが語られました。

全文はこちら



Day 2 11/30

ユネスコスクール関係者約300名が集い、全国大会が開催されました。サヘル・ローズさんによる基調講演に始まり、中・高校生とのパネルディスカッション、生徒も説明役に参加したポスターセッション、そして多様な課題と事例が共有された分科会が行われ、来場者の関心を集めました。ユネスコスクールの今と未来を考える貴重な機会となりました。

第16回ユネスコスクール全国大会

「社会に開かれたユネスコスクール

—多様性と共生の未来への貢献—」



スケジュール

- 10:00-10:10 オープニング
- 10:10-10:35 基調講演「出会いこそ、生きる力」
- 10:35-11:30 パネルディスカッション
- 11:30-11:45 ポスターセッションPRタイム
- 13:00-13:45 ポスターセッション
- 14:00-16:00 分科会
- 1 持続可能なESDの取組のための外部支援の活用に向けて
- 2 集まれ！ユース！！
- 3 社会との相互作用を通して創る探究の学び
- 4 ESDが拓く社会
- 5 国際交流・国際協働学習を創造できる教職員
- 6 学校と地域をつないだESD展開を一緒に考えましょう！
- 16:30-17:10 分科会報告及び総括
- 17:10-17:20 クロージング
- 17:20-18:00 会場開放
- 第15回ESD大賞受賞式 (17:30-18:00)

パネル ディスカッション

パネルディスカッションに登壇した生徒の皆さんに、当日の様子やその後について伺いました。

——全国大会参加の経緯と登壇の感想は？

松雪 先生に推薦され、ぜひ参加したいと思いました。学校では国際的な授業が多く、ユネスコのテーマに触れる機会も多かったため、自然と興味湧きました。自分の考えを多くの人と共有でき、自信にもつながりました。

田口 地域活動やESDに関わっていて、自分たちの活動を発信できる機会だと思い立候補しました。緊張しましたが、思いを伝えたい気持ちが強かったです。登壇後も多くの人に声をかけていただき、刺激的でした。

井上 地域のボランティアや小学校での実習をきっかけに、先生に推薦いただきました。受験期で迷いましたが、思い切って参加しました。他の登壇者の話を聞き、世界にはまだ知らない現実があると実感しました。

——全国大会で印象に残ったことは？

松雪 サヘル・ローズさんの言葉が心に残っています。サインと共に「あなたは唯一無二。自分を大切にしてください」とメッセージを下さり、今も励みになっています。

田口 私もサヘルさんの講演に感動しました。また、一緒に登壇したパティさんとはその後も連絡を取り、活動について色々相談に乗ってもらいました。



サヘル・ローズ
(俳優・タレント)

舞台や映画、コメンテーター等で活動される一方、国際人権NGOでの親善大使を勤めるなど、マルチに活躍中

基調講演 「出会いこそ、生きる力」

イランで生まれ、孤児院で育ち、8歳で養母と来日したサヘルさん。基調講演では、幼少期に経験した様々な困難と、人との出会いに支えられて歩んできた半生を語ってくださいました。語り口には、強い実感と感謝の気持ちが込められており、聴く人の心に深く響きました。また、世界で起きている出来事を「自分の目で確かめること」の大切さや、統計の数字の裏に“顔”のある一人ひとりの人間がいることを忘れないという視点、そして、疑問をもち続け、

それと向き合う姿勢の大切さを語られました。「教育を受けられることは奇跡」と語るサヘルさんの言葉には、強い思いとメッセージが込められていました。参加者からは、「非常に感動した」「自分を大切にしようと思った」「共生について考え直すきっかけになった」など、多くの声が寄せられました。サヘルさんとの出会いは多くの人にとって、生き方を見つめ直し、「生きる力」を与えてくれる機会となったに違いありません。



左:田口 裕佳さん(横浜女学院中学校高等学校) / 中:井上 諄南さん(岡山県立矢掛高等学校:当時) 右:松雪 七之さん(名古屋国際中学校高等学校) 以下、名字のみ・敬称略

井上 私もサヘルさんとの出会いです。地元で講演された際に再会できたことはとても素敵な経験でした。

——「多様性と共生の未来のために私は〇〇します」と宣言されました。その後、進捗は？

松雪 「人に寄り添います」。全国大会後、日本で暮らす外国の方の助けになるべく外国人向けの学校で日本のゴミマナー授業を企画・主導しました。言葉の壁を感じつつも一歩踏み出す良い経験になりました。

田口 「ユースなんみんプラットフォームに入ります」。大学生から参加することを目指し、今できることとして難民への食糧支援や、難民支援について政策提言を議員に提出しました。

井上 「かけはしになります」。今年から大学生になり、アジアの文化やアフリカの歴史等、多様な国の方と実際に交流もしながら、将来の礎を築くべく勉強しています。

——これから取り組みたいことは？

松雪 世界への視野を広げつつ、好きな化学を学び、深め、いずれは国境なき医師団で直接人を支える仕事に就きたいです。

田口 多様性理解や教育の大切さを政治の力で広めるため、学びを深め、将来は政治の場で活動したいです。

井上 現地で人と直接関わりながら現状を学び、共生に必要なものを見つけていきたいです。

——ありがとうございました。

Pick UP!

第2分科会

集まれ！ユース！！ —共生社会の実現に向けた 生徒向けワークショップ—

(企画運営:ACCU国際教育交流部)

中・高校生を対象に、共生社会の実現に向けて「中学生・高校生にできることは何か」を考えるワークショップを行いました。参加者によるディスカッションでは、「外国にルーツをもつ子どもたちの言語面や生活面における課題を、SNSやエッセイなどで幅広く共有し、彼らに寄り添う環境や居場所づくりに取り組みたい」「難民問題について自分事として捉えられるような機会をつくりたい」など、様々な意見から具体的なアクションへと結びつける様子も見られました。

登壇者からのコメント

横浜国際高等学校2年
勝山 遥太さん



第2分科会と2024年度の「BRIDGE Across Asia Conference(p.11参照)」に参加し、自分の意見をもつだけでなく発信する場の大切さ、そして自分自身の未熟さを実感しました。現在は、各プログラム登壇者・参加者の方々の取組や行動力に刺激を受け、新たな活動に向けて準備を進めています。具体的には、株式会社ファーストリテイリングの“届けよう、服のチカラ”プロジェクトや、2025年夏にスイスで開催される交流プログラムに参加予定です。各活動を通じて様々な立場の人と意見を交わすことで、たくさんの方のことに吸収し、今後の活動や自分自身の将来のために役立てていきたいです！

その他の分科会については
こちらをご覧ください！



Day 3 12/1

ユースフォーラム

「今から、ここから、わたしから」

次世代ユネスコ国内委員会*企画による「ユースフォーラム」を開催し、全国各地でユネスコ活動に取り組むユース世代が、分野をこえた共創の可能性を探る多様な議論を行いました。本項では、企画に携わった方々に、フォーラムの様子をご紹介します。



スケジュール

- 10:30-10:45
オープニング
- 10:45-11:05
スペシャルインタビュー
「ユースによるユネスコ活動への期待」
- 11:05-11:30
パネルディスカッション
「ユースによるユネスコ活動のこれから」
- 11:30-13:00
ネットワーキング交流会/昼食
- 13:00-15:00
分科会A【教育】
みんなでつくる『これからの学び』のカタチ
分科会B【防災】
ユネスコの視点で防災を学び、実践する
分科会C【まちづくり】
共に考える『我がまち』の未来
- 15:20-17:10
ワークショップ
「My UNESCO Story Map」
- 17:10-17:30
クロージング

*…日本のユネスコ加盟70周年の機会に、未来を担う若者からの声を今後のユネスコ活動に反映させるべく文部科学省が設置したユース世代による委員会。

分科会の紹介

分科会 A 教育

「これからの学び」について、ユースが中心となって、教員、行政、企業等の様々な立場の方と議論しました。変化が激しく先行き不透明な社会を生き抜く子どもたちに必要な教育について活発に意見が交わされました。



分科会 B 防災

「ユネスコの視点で防災を学び、実践するー未来に生きる防災ー」を全体テーマに掲げ、ユネスコの視点を踏まえた防災、避難所生活を想定したモノづくりワークショップを通じた「未来に生きる実践」を学びました。



分科会 C まちづくり

「我がまち」の魅力や創造性を再考し語り合うワークショップを行い、「まち」の創造性を引き出し世界とつながる取組として「ユネスコ創造都市ネットワーク」へのユース参画の在り方などを実践者と共に議論しました。



動画はこちら



パネルディスカッション

次世代ユネスコ国内委員会 委員
東 和佳奈さん

「ユースによるユネスコ活動のこれから」というテーマでパネルディスカッションしました。ユースの「継続性や地元とのつながり」という悩みに対し、先輩世代が「自分のライフスタイルに活動を組み込む」と答えるなど、世代間対話の実現し、有意義な時間となりました。



田代 成香さん (2025年度から次世代ユネスコ国内委員会 委員)

参加者の感想



ユースフォーラムでは、ユース世代の熱意と創造的なアイデア、行動力に深く感銘を受けました。普段の生活では出会えない多様な背景をもつ皆さんとの対話は刺激的で、新たな視点を得る貴重な機会となりました。この出会いをきっかけに、2025年度から委員会の一員として活動しています。これまでの取組を大切に引き継ぎながら、自身の文化・教育分野での経験を活かし、世界遺産の普及と世代や分野をこえた交流の促進に努めたいです。

苗代 昇妥さん (2025年度から次世代ユネスコ国内委員会 委員)



2024年に初めてユースフォーラムに参加しました。様々な角度からユネスコ活動に取り組む方々との交流やワークショップはとても刺激になりました。そうした方々との交流のきっかけを掴み取ったので、とても有意義な機会になりました。

ワークショップ & トークフォークダンス

次世代ユネスコ国内委員会 委員長
小林 真緒子さん



様々な形で社会課題解決に取り組んでいる先輩世代の方々をお招きし、活動の原動力やご自身のキャリアについてお話しいただくワークショップを行いました。後半は、少人数グループに分かれて先輩方と対話する時間を設け、ユースが社会に出た後もユネスコ活動を続けていくためのキャリアの築き方について考える機会となりました。

トークフォークダンスでは、先輩方とユースが輪になって向き合い、ペアを入れ替えながら対話を重ねました。フォーラムを通じて得た気づきや、明日からすぐに起こしたいアクションを言葉にし、世代をこえて学びや共感を深めました。

永野 蛍さん (2025年度から次世代ユネスコ国内委員会 委員)



今回初めて参加したユースフォーラムで、ユースならではの視点で熱意をもって活動を行っている方々との交流や情報交換ができ、とても勉強になりました。今後も活動を継続していくきっかけを頂き、ありがとうございました。

草莽崛起:ユースが紡ぐ「次世代」への歩み

～ユースフォーラム企画者達へのインタビュー～



次世代ユネスコ国内委員会
副委員長 谷垣 徹さん
(以下、名字のみ・敬称略)



次世代ユネスコ国内委員会
委員 佐藤 世彦さん
(以下、名字のみ・敬称略)

——今回のフォーラムテーマは「今から、ここから、わたしから」でしたね。
谷垣 全3部構成で、第1部は河瀬直美ユネスコ親善大使からのメッセージとユネスコ活動に参画しているユースによるパネルディスカッション。第2部は「教育・科学・文化」の三つの分科会でワークショップを行いました。第3部はユースと先輩世代がキャリアや活動の展望を語り合いました。世代をこえた「縦のつながり」と分野横断的な「横のつながり」を深めることが狙いです。

——参加を通して、どんな変化がありましたか？
佐藤 第3部で多様な世代の実体験を聞いて、特にジオパーク研究員の話から、学術が社会やユネスコとどう関わられるかが具体的に見えてきました。

この経験をきっかけに、以前から母校の中学で続けている森づくりと食文化の活動にも、いっそう力を注いでいます。多くの出会いが、私の次の一歩を後押ししてくれています。

谷垣 フォーラム後、次世代ユネスコ国内委員会への応募が増え、出会いが新たな参加につながっていると感じます。私は今回司会として関わりましたが、全国規模のイベント運営は貴重な経験でした。2025年度は副委員長として委員会全体の運営に携わり、仲間の思いを形にすることにやりがいを感じています。

——印象に残ったプログラムは？
佐藤 文化ワーキンググループの分科会です。地域の魅力を再発見し、それが世界にどう貢献できるかを考える「ユネスコ創造都市」の理念を体現する活動でした。今後は高校生向けにも展開したいです。

谷垣 第3部のセッションは、互いに刺激を与え合える貴重な場でした。私はユース世代ですが、これから活動に取り組みたいユースにも経験を伝えることができ、有意義な時間でした。

——やりがいを感じた瞬間は？
谷垣 長く準備してきたフォーラムに多くの人が参加し、「楽しかった」と言ってくれたことが本当に嬉しかったです。

佐藤 地方出身の自分にとって、全国のユースと交流できたことは大きな価値でした。各地のユース一人ひとりが当事者として熱い志を持ち、草の根から社会全体を動かしていくといった「草莽崛起」的な力を感じました。

——最後に、お二人にとってユネスコ活動とは？
佐藤 興味や視野を広げてくれる土台です。創造都市や食文化だけでなく、ジオパークなど新しい分野との出会いもありました。

谷垣 「何度でも戻ってこられる場、何度でもスタートできる場」です。大学時代に始まり、社会人になっても関わり続けています。これからもそんな場であり続けてほしいです。

ユネスコってなに？

“ユネスコ”…知っているようで、実は何をしているところか詳しく知らない方も多いのでは？「今更聞けない！」「今まで知らなかった！」「知っていると思っていたけど…？」そうした「ユネスコって何だろう？」に、改めて答えます！

ユネスコの成り立ち

ユネスコは「UNESCO: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization」の略称で、日本語では「国連教育科学文化機関」と称されています。第二次世界大戦後、1945年11月にイギリスとフランス両国政府の招へいにより、ユネスコ設立のための会議がロンドンで開催され、同年11月16日にユネスコ憲章が採択、翌年11月4日に効力を発しました。日本がユネスコに加盟したのは1951年。国連への加盟は1956年になるため、戦後、日本が初めて加盟した国連機関がユネスコであり、日本が国際社会に復帰するきっかけとなったのがユネスコでした。2026年はユネスコ創設80周年であるとともに、日本の加盟75周年の記念の年になります。^{※1}

ユネスコの使命

ユネスコ憲章前文にある「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という一文は、ユネスコの理念を示すものとして広く知られています。相互の風習と生活を知らないことで、疑惑と不信を起し、その不一致がしばしば戦争を招いたとも記されています。無知と偏見、文化の断絶を解消し、人の心の中に平和のとりでを築くことを目的に掲げ、「教育・科学・文化(コミュニケーション)」の分野での国際協力を推進する機関として発足しました。^{※2}

ユネスコはどんなことをしているの？

教育・科学・文化・コミュニケーションの分野で、それぞれの部門が下記のように平和で持続可能な社会の実現に向けた活動を行っています。^{※3}

教育: すべての人に生涯を通じた質の高い教育を提供することへの働きかけ

科学: 自然科学と社会科学の研究を通じた知の創造と活用、貢献、並びに環境保護等グローバル課題への対応

文化: 文化の保護・保存、多様性の保存や創造性の促進

コミュニケーション: 表現の自由やメディア、情報リテラシーやデジタルトランスフォーメーション

ユネスコと ACCU

実はよく聞かれるこの質問！ここで、ユネスコと ACCU(ユネスコ・アジア文化センター)の関わりについてご紹介します。ACCUは1971年にユネスコから、アジア太平洋地域の文化交流を促進する中核的センターとして日本への設置を打診されたことをきっかけに、日本政府と出版業界を中心とする民間の協力によって設立されました。以来、日本国内におけるユネスコ活動の拠点として、ユネスコの理念に基づく様々な事業を行ってきました。近年では、文部科学省委託

による「ユネスコ未来共創プラットフォーム」や「ユネスコスクール」事務局の運営、また、ユネスコが世界で展開する国際プロジェクトの日本側コーディネーターとして国内実施をサポートするなど、ユネスコ活動に関する実務を担っています。つまり ACCU は、ユネスコの想いをつなぐ「架け橋」。日本と国内外のユネスコ活動をつなぎ、活性化させるという役割を果たすべく活動を続けています。

※1…参考:文部科学省、外務省
<https://www.mext.go.jp/unesco/003/002.htm>
https://www.unic.or.jp/info/un/unsystem/specialized_agencies/unesco/
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/unesco/gaiyo.html>

※2…参考:文部科学省「国際連合教育科学文化機関憲章(ユネスコ憲章)及びユネスコ活動に関する法律(抜粋)」
<https://www.mext.go.jp/unesco/002/006/001/shiryo/attach/1356082.htm>

※3…参考:文部科学省
<https://www.mext.go.jp/unesco/003/001.htm>

ユネスコ活動をもっと知りたい人は？

こんなイベント・プラットフォームがあります！

UNESCOWEEK(ユネスコウィーク) 2025/26

2025年12月5日(金)～12月11日(木)に開催決定！

2025年度もユネスコウィークの開催が決定しました！日本各地でユネスコ活動に携わる方、SDGsの達成に向けた活動に取り組む方、また、これから関わりたいと思う方がユネスコについて知り、参加しなくなる、そんな新しい協働が生まれる機会とするため、様々な企画を用意しています。ACCUも、国

際シンポジウムやユネスコスクール全国大会等を開催・運営します。なお、ユネスコスクール全国大会は12月6日(土)に、上智大学で開催予定です。詳細は、ユネスコ未来共創プラットフォームのウェブサイト(下記の二次元バーコード)からぜひご確認ください！



ユネスコ未来共創プラットフォーム

ユネスコ活動の情報を集約！ここを見ればやりたいことが見つかる！?

「ユネスコ未来共創プラットフォーム」は、国内外のユネスコ活動について知ること、発信することのできるポータルサイトです。ユース世代から先輩世代まで、また、教育分野から科学、文化の分野まで、世代と分野を飛びこえ、ユネスコ活動に関わるすべ

ての人と情報が行き交う、そんなプラットフォームを目指しています。イベント情報を探すもよし、イベントを共有するもよし、ユネスコ関連団体を知る場としてもご活用いただけます。ぜひ遊びに来てください♪

ACCUの活動に参加するには？

こんなプログラムがあります！

活動詳細はこちら



教職員交流

初等中等教職員国際交流事業

日本、韓国、中国、タイ、インドの初等中等教職員等を対象に、日本からの教職員派遣及び各国からの教職員の招へいを行っています。本事業では、参加教職員による「対話」や「交流」を軸に、教育機関の訪問等の活動を展開し、参加者が「Change Makers」として活躍する端緒を開くことを目指しています。

青少年交流

BRIDGE Across Asia Conference(BAAC)

日本、モンゴル、韓国、タイ、インドの高校生を対象に、相互理解の促進と国境を越えたネットワーク構築を目指す国際協働学習プログラムです。5か国の高校生が交流や協働活動を通じて異文化への理解を深め、多様性を尊重する姿勢を育む機会を提供しています。

識字教育支援

ACCUでは1980年代初めから識字教育の普及に取り組んでおり、カンボジアでの識字教育支援事業「SMILE Asiaプロジェクト」や国際協力機構(JICA)の開発途上国の教育関係者向け研修事業「ノンフォーマル教育」を実施しています。また、毎年9月に行われるJICA・開発コンサルタント・大学・NGOによる「教育協力ウィーク」において、ACCUも世界識字デーに合わせて識字事業の経験を踏まえた登壇等を行っています。

協働から広がる 持続可能な国際交流①



～韓国教職員受入れの経験から～

2024年度の「韓国教職員招へいプログラム」において、韓国の先生方の受入れにご協力くださった兵庫県明石市内の教育機関の皆様インタビューを実施しました。

ご協力いただいた皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

明石市立二見中学校

校長 増田 恵津子氏

(前明石市立魚住東中学校 校長：
2025年3月まで)



対話の重要性を再確認しました。このプログラムを通して、教職員から、教職員対象の海外派遣プログラムに興味を持ったという声や自身のスキルアップに向けたモチベーションが高まったという声を聞き、こうした変化や気づきがあったことも成果の一つとして嬉しく思います。

教職員の受入れ協力のきっかけ

現職に至るまで、国内及び海外における教育経験があり、貴重な体験と学びの機会を得ることができました。その過程で、「学校で国際交流をしたい」という思いが強くなりました。また、自分自身が何かに挑戦する姿を子どもたちや教職員に見せていけないといけない、子どもたち・教職員・地域の皆様が「すごく楽しかったな」と思えるような活動をしたと思っていたところ、ACCUの海外教職員招へいプログラムの受入れに関する情報を見つけて応募しました。

教職員の受入れ協力のご感想

明石市立魚住東中学校での受入れが決まってからは、一人で準備するのではなく、子どもたち・教職員・地域の皆様のご協力を得て進めました。準備の段階から多くの人に関わることで、相手の知らない一面を知ることができ、準備や韓国の先生方との交流を通じて、

今後のビジョン

今回は韓国でしたが、国際交流の輪を更に広げ、教育活動を通じて国際理解の必要性を発信していきたいです。そのために、まずは自分自身が積極的に海外とつながる機会にアクセスし、何らかの形で子どもたちや教職員に還元していきたいと思えます。また、教職員や地域の皆様の「やりたい!」という気持ちに寄り添い、今できることを一緒に考えて実現をサポートできるような存在でありたいです。



明石市教育委員会事務局
学校教育課

課長 和田 徳幸氏



教職員の受入れに関わったご感想

交流当日は韓国の先生方に明石市の教育政策についてご説明し、その後、学校での活動を見学しました。子どもたちが韓国の先生方と韓国語で積極的にコミュニケーションをとっている姿がとても印象的で、プログラム終了後も、子どもたちが韓国の先生方から教えていただいたあそびを楽しんでいたことを伺い、子どもたちにとって非常に良い経験になったと感じています。私自身も韓国の教育について直接お話を聞き、知見を広げることができました。

教職員との交流から気づいたこと、今後のビジョン

韓国の先生方が一般家庭を訪問する「ホームビジット」を実施するにあたり、学校から地域の皆様へ協力を呼

びかけ、当日は各家庭で温かくお迎えいただきました。このように地域の方が快く協力してくださった背景として、日頃から学校が地域とのつながりを大切にしていることがあると思います。今後も学校・家庭・地域が連携し、子どもたちのためにより良い環境づくりができればと思います。また、明石市内でも外国にルーツをもつ子どもが増えている中、教職員が多様な文化をもつ子どもたちを前に教育に携わっていることを改めて認識し、目の前の子どもたちにとって必要な教育を模索しながら教育に関わることが重要であると考えます。この過程で、教職員が学校外のリソースをうまく活用し、連携を図りながら教育活動を進めることも肝要です。今回増田校長先生が韓国の先生方の受入れに応募してくださったように、今後も学校における教育活動の中で、子どもたちが様々な経験を得られるチャンスを先生方につくってもらえると嬉しいです。今回の受入れを通じて、海外教職員との交流から日本の教育や日々の実践を新たな視点から見つめ直すことの大切さを感じました。教育委員会としては、ACCUの海外教職員受入希望調査のような、外部機関から来るご案内を積極的に周知していきたいと思えます。

明石市立魚住東中学校

教諭 野本 克磨氏

ホームビジット受入れ協力のご感想

学生時代に留学した際、ホームステイ先のホストファミリーに大変お世話になり、その時の恩返しになればと、韓国の先生方をお迎えしました。韓国の先生のためにすき焼きを用意したところ、「すき焼きの『すき』はどういう意味ですか?」と聞かれ、日常生活で当たり前に使っていた言葉を、改めて問い直すことができました。当日は私の家族が好きな韓国の音楽やドラマなどの話で盛り上がり、今でも韓国の先生との交流が続いています。



協働から広がる 持続可能な国際交流②



～インド教職員受入れの経験から～

2024年度の「インド教職員招へいプログラム」において、
インドの先生方の受入れにご協力くださった埼玉県立越谷北高等学校の先生方にインタビューを実施しました。
ご協力いただいた皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

埼玉県立越谷北高等学校

教諭/国際交流委員長
高橋 晋一氏



教職員の受入れ協力の きっかけとご感想

スーパーサイエンスハイスクール(SSH)^{*}指定校である本校では、科学分野において諸外国の学校との交流を検討していました。ACCUの海外教職員交流会への参加を機にインドの先生方とご縁ができ、「実際に本校でもインドの先生方をお迎えして交流する機会をつくりたい」と思ったことが受入れのきっかけです。交流当日は理数科の生徒によるサイエンスプレゼンテーションを行い、この経験は彼らの自信につながったようです。生徒とインドの先生間の相互理解が深まる様子を見て、対面交流の良さを改めて実感しました。

受入れ準備や学校内での 連携について

前任校でも国際交流を担当しており、異動時に「高橋先生がいなくなると国際交流を続けることが難しい」と

言われ、持続可能でなければ一過性の国際交流で終わってしまうことを痛感しました。そこから、今回の受入れをはじめとする本校の国際交流では、多くの方と協働して進めるようにしています。受入れ準備段階は、ヴィーガン対応の昼食手配など調整に苦労しましたが、理数科や英語科、家庭科など様々な科目担当者で構成された「国際交流委員会」の先生方のご協力やアイデアにより、充実した交流ができたと思います。

今後のビジョン

学校で国際交流を続けていくポイントは、組織の中に「国際交流」を組み込んでいくことだと思います。具体的には、本校の国際交流委員会は正式な分掌ではないため、これを分掌にすることや、学校の方針の中に国際交流につながる視点を入れるなどの試みから、本校で継続的に国際交流ができるようにしていきたいです。また、国内外の様々な学校との交流機会をつくり、このつながりをベースに本校主催のフォーラムができたかと考えています。さらに、自分が培ったノウハウやネットワークを若手の先生方にも共有することで、生徒のみならず先生方の橋渡し役にもなれたら良いと思います。

※先進的な科学技術、理科・数学教育を通じ、生徒の科学的探究能力等を培うことで将来社会を牽引する科学技術人材を育成するための取組。文部科学省により指定される。

埼玉県立越谷北高等学校

教諭 青木 朋恵氏



国際交流委員会に入ったきっかけ

インドの先生方の受入れ後の2025年度から国際交流委員会に加わりました。もともと人と人をつなぐことや国際交流に興味があり、高橋先生にお願いして、インドの先生方の受入れをはじめとする本校の国際交流に関わるようになりました。高橋先生はACCUのプログラム等で知り合った国内外の先生方と様々な活動を展開されているため、そこで蓄積されたノウハウを積極的に吸収したいという思いもあり、同委員会に入ることができて良かったと感じています。

学校での国際交流について

現在、本校を訪問したインドの先生お二人と学校間オンライン交流を計画中です。調整の過程では、インドの祝祭日や長期休業期間を除いて実施日を決めることに苦戦しつつ、お互いが同じ熱量をもってしている時に

調整を進められるよう心がけています。交流内容については、西ベンガル州の学校と本校普通科の1年生がSDGsに関するディスカッションを行い、デリー準州の学校と本校理数科の3年生が各自で取り組んでいる研究について説明する予定です。各科の生徒たちが交流機会をもてるようにし、かつ、彼らの学びとの連携も意識した交流を目指しています。普通科の1年生は夏休みの課題としてSDGsについて考え、2学期にクラスでスピーチをする予定のため、これを夏休みの課題として終わらせず、国際交流の内容にも組み込むことで彼らの学びや学校の教育活動を発展させたいと考えています。また、交流当日は一方的な発表や説明にとどまらない、双方向的な交流ができるよう工夫していきたいです。

今後のビジョン

現在計画中の国際交流一つ一つと丁寧に向き合い、人事異動といった環境の変化があったとしても本校で国際交流を継続できるような土台づくりに力を入れていきたいです。また、「何のために国際交流をするのか」ということを自分なりに考えながら、今できることに精一杯取り組みたいです。

埼玉県立越谷北高等学校

教諭 坂東 恵氏

(国際交流委員6年目:2025年度現在)



私は新聞部の顧問をしており、インドの先生方との交流当日に新聞部の生徒がインタビューする機会を頂きました。生徒も私自身もこれまでインドの方と交流するチャンスがなく、インドについて深く知ることのできる貴重な経験となりました。また、実際に対話・交流することで、インドを身近な国として感じる事ができ、生徒からは「インドの文化に対する興味・関心が高まった」という声もありました。

埼玉県立越谷北高等学校

教諭 中村 慶子氏

(2025年度から国際交流委員)



インドの先生方との交流に興味があり、当日は一教職員として参加しました。インドの先生に頂いたピンディーを額に貼り校内を歩いていると生徒から「ナマステ！」と声をかけられ、普段は経験できない生徒との交流が生まれたことも印象に残っています。日印教職員交流の時間には、互いの学校や教育実践について話し合い、国や文化は違えど教職員として共通する教育観があることに気づき、同じ目線で意見交換できたことがとても良かったです。